

－144－ JASS8 防水工事（解説）

のものや、フラットバー状のものが一般的である。

（9） 成形伸縮目地材

成形伸縮目地材のキャップは合成ゴムや合成樹脂からなり、本体の頂部にあつて、所定の寸法安定性、耐荷重性、耐摩耗性、耐衝撃性を有しているものである。

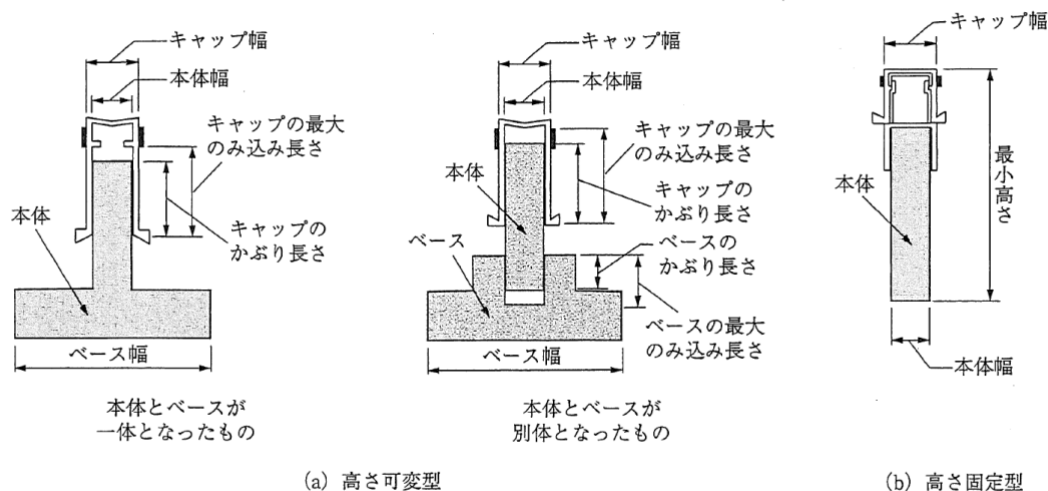
本体は、主として合成樹脂の発泡体からなり、現場打ちコンクリート保護層のムーブメントを緩衝するよう、所定の柔軟性、復元性を有しているものである。成形伸縮目地材の種類とキャップ幅は特記による。

- （i） 成形伸縮目地材の種類にはⅠ類（付着タイプ）とⅡ類（アンカータイプ）の２種類がある。

Ⅰ類は現場打ちコンクリート保護層に対する付着層を備えたキャップまたは付着層とアンカー効果を備えたキャップ、Ⅱ類は現場打ちコンクリート保護層に対するアンカー効果を備えたキャップ、これらとそれぞれキャップ幅の 80 % 以上の幅の本体を組み合わせたものである。

- （ii） 成形伸縮目地材は、現場打ちコンクリート保護層の厚さに対応させる形状として、高さ可変型と高さ固定型の２種類がある。高さ可変型は、所定の高さ調整機能を有し、現場打ちコンクリート保護層の厚さの変化に連続して適応可能なものである。高さ固定型は、スラブで水勾配が確保されていて、現場打ちコンクリート保護層の厚さの変化が少ない場合に適応可能なものである。

成形伸縮目地材の形状例を解説図 1.23 に示す。



解説図 1.23 成形伸縮目地材の形状例

- （iii） 成形伸縮目地材の性能・品質は、成型伸縮目地工業会発行「成型伸縮目地材規格」（1995 年 4 月 1 日改訂）に解説表 1.19 のように提案されている。

「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 8 防水工事」

出典：日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 8 防水工事」

2014 年改定

解説表 1.19 成形伸縮目地材の品質

項 目	品 質		試験方法の概要
	I 類	Ⅱ 類	
圧縮性能	最大荷重 160 N/cm 以下 ^[注1]	最大荷重 240 N/cm 以下 ^[注1]	試験の温度条件が 20 ± 2℃および 60 ± 2℃で、試験片を圧縮速度 1.0 mm/min で、0～30 %圧縮したときの最大荷重値を測定し、同時に目視による外観検査を行う ^[注2] 。
	キャップ表面に割れが生じないこと		
伸び性能	伸び率 30 % でキャップ付着層部もしくはキャップアンカー部とモルタル面が離脱しないこと		試験の温度条件が 20 ± 2℃および 60 ± 2℃で、試験片を引張速度 1.0 mm/min で、0～30 %まで引張試験を行った時の目視による外観検査を行う ^[注2] 。
耐摩耗性能	1 000 mg 以下		JIS K 7204：1999 プラスチック－摩耗輪による摩耗試験方法に準じる ^[注3] 。
加熱伸縮性能	加熱伸縮率 0.5 % 以内		JIS A 5756：1997 建築用ガスケットによる加熱収縮率試験に準じて、70 ± 2℃において 168 時間加熱した後、標準状態で 4 時間放置する ^[注4] 。
	キャップ部に著しい変形がないこと		
耐衝撃性能	P D－3 合格		日本建築学会：建築工事標準仕様書「防水工事」（JASS 8-2000 年版）メンブレン防水層の性能評価試験 3.2 耐衝撃性試験方法に準じる ^[注4] 。
耐候性能	キャップ部にひび割れが生じないこと		JIS A 6008：2006(合成高分子系ルーフィングシート)による促進曝露試験に準じる ^[注3] 。

- [注] 1. 試験体（高さ 80 mm）単位長さあたりの最大荷重
 2. 試験体は、実際の使用条件に近い形状のものとする。
 3. 試験体は、キャップ部から作成する。
 4. 試験体は、キャップ部のみとする。

※伸び性能の試験値「 $20 \pm 2^{\circ}\text{C}$ および $60 \pm 2^{\circ}\text{C}$ 」は「 $20 \pm 2^{\circ}\text{C}$ 」の誤記。

また、同解説 P-189 には形状・寸法及び品質について記載されている。

（13）成形伸縮目地材

（i）形状および寸法

目地幅は 25 mm 以上、本体は目地幅の 80 % 以上、保護コンクリートの上面から下面にまで達するよう高さの調節が可能なもので、キャップ側面に付着層またはアンカー部を備えた製品とする。

（ii）品 質

成形伸縮目地材の性能・品質は、成形伸縮目地工業会発行「成形伸縮目地材規格」（1995 年 4 月 1 日改訂）に提案されている性能・品質〔解説図 1.23，表 1.19 参照〕に適合するものとする。

d. 保護・仕上げ

アスファルト防水層の保護・仕上げは、表 1.3～1.8 を標準とし、その種類は特記による。

(1) 屋根の工法

屋根の防水層の保護・仕上げの施工法は、下記を標準とする。

(i) 現場打ちコンクリート

防水層が完成した後、平場には絶縁用シートを全面に敷き込み、成形伸縮目地材を設置し、JASS 5（鉄筋コンクリート工事）に準拠してコンクリートを施工する。

コンクリートには溶接金網を挿入する。

立上りパラペットおよび塔屋などの立上り際には、成形緩衝材（コーナークッション材）を取り付ける。成形伸縮目地材の割付けは、縦・横の間隔が 3 m 程度と、立上りパラペットおよび塔屋などの立上り際から 600 mm 以内の位置とする。

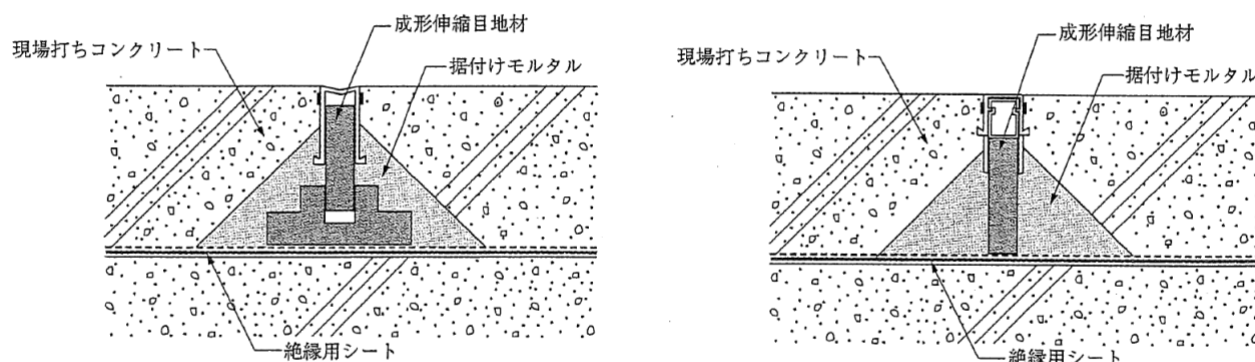
成形伸縮目地材はキャップ幅を 20 mm 以上とし、防水層上面の絶縁用シートから保護コンクリート表面に達するものとする。コンクリート・溶接金網・目地材の種類は、特記による。

立上りは、れんが類押さえ、現場打ちコンクリートまたは乾式工法の中から特記により選定する。立上りをれんが類押さえとする場合は、モルタルで基礎を作り、JASS 7（メーソンリー工事）に準拠し、れんが類を防水層から 30 mm 以上離して積み上げ、各段ごとに防水層との間にモルタルを空げき（隙）のないように充填する。その表面は JASS 15（左官工事）に準拠してモルタルを塗り付けて仕上げる。

立上りを乾式工法とする場合、その材料および施工法は、特記による。

— 168 — JASS8 防水工事（解説）

- 3) コーナークッション材は、保護・仕上げ層の仕上げ面にあたる立上り部にうたれた墨出し線に沿って、上掛けアスファルトや両面粘着テープなどを用いて、取り付ける。
- 4) 伸縮目地の材料・施工法の例を解説図 1.55 に示す。成形伸縮目地材の割付けは、縦・横の間隔が 3 m 程度と、立上りパラペット周辺の際および塔屋などの立上り際から 0.6 m 以内の位置とする。成形伸縮目地材はキャップ幅 20 mm 以上で、防水層上面の絶縁用シート面から保護コンクリート表面に達するように設置する。なお、寒冷地や断熱保護防水工法（AC-PF または AM-PF）の場合、保護コンクリートの年間温度差が通常の場合に比べて大きくなるため、成形伸縮目地材の縦・横の間隔を 2.5 m 程度とするなどの処置が望ましい。
- 5) 成形伸縮目地材を絶縁用シート表面に目地の割付およびレベル調整の水糸に従ってコンクリートレベルまでを調節しながら目地建てを行い、コンクリート流入圧や打設圧に対して安定するように成形伸縮目地材の両サイドに据付けモルタルを盛りつけて、固定する。この場合、固定用据付けモルタルを成形伸縮目地材キャップの天端まで盛り上げて固定してはならない、キャップの天端まで盛り上げた場合は、保護コンクリートの目地周辺のコンクリートに小さなひび割れが多数発生して外観上の不具合となる。したがって、据付けモルタルは成形伸縮目地材のキャップの下端にフック状のアンカーがあるところまでモルタルを盛り上げて固定することが重要である。なお、高さ可変型の成形伸縮目地材では、保護コンクリートの打設圧力で押し流されたり移動することを防止する目的で、固定用の粘着テープの状況や止め付け高さ可変用のピンの状況を十分に確認して、目地材が確実に止め付けられてから、据付けモルタルなどで確実に固定することが重要である。



解説図 1.55 伸縮目地の施工例

- 6) 同様に溶接金網（ ϕ 3.2～6.0 - 100 × 100 mm 程度）は保護コンクリートの伸縮を制御し、ひび割れの発生を防止するために用いる。したがって、保護コンクリート厚のほぼ中央に設置されるように留意しなければならない。

「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 8 防水工事」

出典：日本建築学会編「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 8 防水工事」

2014 年改定

- 7) 保護コンクリートは JASS 5（鉄筋コンクリート工事）に規定された普通コンクリートを用いる。屋根重量を軽くすることを考慮して軽量コンクリートが用いられたことがあるが、過去の事例では経年に伴う挙動が大きかったり、凍害により表面が損傷したり、さらには仕上げのタイル張りにはく離を生ずるなどの支障をきたすことがあるので、普通コンクリートを用いることが望ましい。
- 8) 保護コンクリートの打設は防水層を損傷しないように注意して行い、表面仕上げは直ならし仕上げのほか、モルタル塗り、タイル張りなどがある。コンクリートの表面仕上げの方法および表面の平たんさは JASS 5（鉄筋コンクリート工事）に準拠する。